

## いもつと 和辻哲郎

日本を代表する倫理学者和辻哲郎は、一八八九（明治二十二）年、神崎郡砥堀村（現在の姫路市仁豊野）に生まれた。和辻は仁豊野の尋常小学校を卒業し、加古川の鶴林寺の境内にあった高等小学校に入学するために、父の妹の嫁ぎ先である叔父井上政次郎の家へ預けられる。和辻はすぐに新しい生活に慣れた。この話はそのころのことである。

\* \* \*

「ガラッ。」

教室の戸が開いた。みんなが一斉にそちらを見た。先生がげん顔をして戸口に近寄った。戸を開けた職員が先生にささやいた。その時、哲郎の耳に「和辻……」という名前が聞えて、はっとした。

先生が、

「和辻くん。」

と言つて手招きした。哲郎は、慌てて先生のそばに寄ると、

「何か急用でうちから迎えが来ている。急いで帰りなさい。」

と、言われた。走つて井上の家に帰ると、捨さんが家の前に立っていた。

「捨さん。何があつた。」

哲郎は、息を切らせながら聞いた。

「哲郎さん。お兄さんが重体で、すぐに会いに帰つて来いということです。」

哲郎は、頭が真っ白になって何も考えられない。

哲郎は身支度をしてすぐに捨さんと井上の家を発った。加古川の町へ向かう途中、哲郎は捨さんに兄の病気の様子を探ねた。しかし、捨さんはあまり詳しいことを聞いてはいないようだ。

哲郎は、捨さんと並んで田の中の細い道を駆へと急いだ。黙っていると哲郎の胸にだんだんと不安のかたまりがこみ上げてくる。兄さんは死ぬのだろうか。もうだめだから、こうして捨さんが迎えに来ているのではないだろうか。

「捨さん、家を何時ごろ出たの。」

「八時ちょっと前の汽車に乗つてきた。」

「じゃあ、もう三時間も前なんだ。」

哲郎は、あるいはすでに兄は死んでいるのではないかという恐ろしい思いに襲われた。

突然、「死」というものが哲郎の前に現れてきた。

哲郎は、兄の姿を思い浮かべた。兄は六歳年上であつた。哲郎が幼いころ、兄がねんねこ半纏でおぶつて裏口から家の外へ出て、村の西側を流れている小川沿いに田のあぜ道をしばらくの間歩き回つてくれたことがある。あの時は自分が病気でしばらく寝ていた時のことであつたように思つた。

兄が小学校に行くのに、くつついて村はずれまで行ったことももある。

読み物のおもしろさを教えてくれたのも兄であった。わからないことがあれば兄に聞きに行った。兄がいることの安心感、兄を頼りにする習性が、物心ついたところからずっと自分にあつたことに気づいた。そのかけがえのない兄を奪い去られるという悪夢に押さえつけられながら、加古川から乗った汽車に揺られていた。

あえぐような気持ちで家に入ったが、幸い、兄の病気は大事に至らず、峠を越えていた。

仁豊野の家に一晚泊まって、翌日加古川へ戻ることにした。その折、四歳になる妹のかが、二月ばかり離れていた間に見忘れたらしく、恥ずかしかって哲郎のそばに近寄らないのが何となくもの悲しい気持ちになった。

「かの。」

呼びかけても、妹ははにかんで逃げ回った。加古川に帰る時、兄のことよりむしろ、この妹のことが心残りに感じた。

それから、一カ月ほどして夏休みになり、哲郎は、妹と遊ぶことを楽しみに思いながら仁豊野に帰った。ところが、その妹が病気で寝ており、病状はよくなかった。

数日後、近くの村へ使いを頼まれた哲郎は、川原を歩いている時、そばにカラスが舞い降りてえさをあさっているのを見た。それを見ているうちに、兄の時と同じように、妹が「死」に奪い去られるのではないかと不安に包まれた。哲郎はふいに小石を拾った。この石をカラスに当てることができれば、妹の病気は必ず治るという考えが浮かんだ。哲郎は、カラスをめぐけて小石を投げた。当たりそうになるが、カラスはひょいと飛び立ってすぐ近くに降りる。哲郎は、また小石を拾って投げた。当たらない。哲郎は、また投げた。

「石が当たらなければ、かのは死ぬ。」

その恐怖を振り払おうと、哲郎は夢中になって石を投げ続けた。しかし、カラスは前よりも遠のき、やがて飛び去っていった。哲郎は石をつかんだまま立ちすくんだ。

使いも忘れ、哲郎はうなだれて家に戻った。その哲郎に父が言った。

「かのが死にかけとるぞ。」

哲郎は川原の占いが的中したことに仰天した。急いで妹の寝ている部屋に行った。まくら元で、「かの、かの。」

と、呼んでみたが、通じているのかどうかわからなかった。

哲郎はだんだん息を引き取っていく妹を見守るしかなかった。

哲郎は、隣の部屋へ駆け込んで大声を上げて泣いた。涙があふれるように流れ出た。どれくらい泣き続けたのか、ふと自分の泣き声に気づいた。哲郎は、泣くことが悲しさを洗い流していくのだとこの時感じた。

\* \* \*

「和辻の倫理学」は、中学生の皆さんには難しいかも知れません。

しかし、一昔前は、大学生になれば、和辻哲郎の「人間の学としての倫理学」、西田幾太郎の「善の研究」、阿部次郎の「三太郎の日記」の三冊が、必読の書でした。和辻の倫理学はそれほど読まれたのです。

このほかに、一般の人々にも広く読まれたのは、和辻の「古寺巡礼」と「風土」です。いつか皆さんも、郷土の偉大な哲学者、和辻哲郎の著書をひもといてみる機会があるとういひすね。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。